

「今、正体のわからない悩みをもつ若者が増えています。集団のなかでどうも居心地が悪い。何をやっても満ち足りた感じがしない。しかし、彼らに『悩みはある？』と質問すると『特にはありません』と答える。自分の抱えているモヤモヤが、悩みだという自覚がないのです」、作家の田口ランディーさんの言葉です。「わたしたちの社会は自由だから、だれもが幸せになれると思いがちです。自由によって可能性は無限に広がるとも考えてきました。しかし今、この自由が必ずしも幸福と結びついていないのでは、と人々は思うようになっていきます」、姜尚中さんの言葉です。物質的な豊かさや、溢れる情報にとりかこまれ、様々な選択の自由が与えられている現代。しかし、そのなかで、あたりさわりなく上手に世渡りし、適当に泳ぐ術は身につけられても、一体何が大切で、自分はどこに向かっていけば良いのか、生きるための指針が益々見えにくくなっているのかもしれない。農村銀行頭取のムハマド・ユヌスは、「利益をあげるということは、目標ではなく、手段です」と語っています。また、ある人は「何になりたいかよりも、何をしたいのか」が根本的に大切だと言っています。以上のような言葉を聞いていると、現代は、ものや情報が多すぎる反面、何を目指していくことが本当の喜びや幸せにつながるのか、そのことがかえって強く問われる時代になってきたと考えることもできます。

本日の聖書箇所で、イエスは神の国に招かれる喜びを「大宴会のたとえ話」で示そうとされています。しかし、このたとえ話では、前もって宴会に招かれていた人々が、畑や牛を買って確かめるために、新妻を喜ばせるために、という理由で、宴会を突然断ってしまいます。どれも断る正当な理由にはなりますが、人々は皆、イエスが招こうとしている喜びを、他の楽しみと比べたときに、さほど大したことはないと判断したことにもなります。イエスは 13～14 節で、「お返しができない」人々を招くことの幸いを語っています。そこでは、神から「報われる」喜びがあるとするからです。つまり、人間にとっての本当の喜びや幸せは、相手から期待する見返りのなかにあるのではなく、自分の期待を超えたところ、神から与えられるもののなかにあるとするのです。そのために、イエスを通して、「無理にでも」（23 節）私たちに招こうとする神の熱意をたとえ話は伝えています。

色々多すぎて見えない時代。聖書に記されたイエスの招きの言葉を選びとれる者でありたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）

